

第三章 幽霊だ！

「幽霊だ！」とハックは言いました。

「幽霊が見える！ やつらはこっちに向かってくるよ、本当に怖いよ！」

「幽霊は僕たちが見えるのかな？」とトムが尋ねました。

「もちろんだよ、幽霊は何だって見ることができるんだ」とハックは答えました。

「ああ、俺、どうしてここに来たのかなあ？」

「怖がらないで」とトムは言いました。

「物音を全く立てないようにしよう」

三人の幽霊は、墓地で静かに動きました。

彼らはトムとハックの近くにきました。

「トム！」とハックはささやきました。

「彼らは幽霊じゃない、人間だよ。そして彼らのうちの一人はマフ・ポッターだよ。俺は彼の声を知っているんだ」

「君の言う通りだね、ハック」とトムは言いました。

「そして、インジャン・ジョーとロビンソン先生だ。でも、彼らはここで何をしているんだろう？」

「俺には分かる」とハックは言いました。

「彼らは墓泥棒なんだ。彼らはお墓から死体を盗みたいのさ」

「えっ！ でもどうして？」と、ひどく驚いたトムは尋ねました。

「ロビンソン先生は死体が欲しいのさ、だって彼は死体を切って研究しているから」とハックは言いました。

「俺の父さんが、ロビンソン先生について俺に教えてくれたんだ」

三人の男は、ホス・ウィリアムスのお墓のところにいました。

インジャン・ジョーとマフ・ポッターが掘り始めました。

間もなく、お墓が開かれました。

彼らは死体を見つけて、ゆっくりとそれを地面から引っ張り出しました。

「いやあ、先生」とマフは言いました。

「もし俺たちに、死体をあなたの家まで運んでほしいのであれば、あなたは私たちに5ドル渡さなくちゃいけないよ」

「何だって！」とロビンソン先生は怒って言いました。

「私は今朝、君たちに支払ったのではないか。私はこれ以上のお金を君たちにあげるつもりはない！」

「俺はもっとお金が欲しいんですよ、先生」とインジャン・ジョーが言いました。

「5年前、俺は先生のお父さんの家に行きました。俺はおなかをすかせていて、先生に何か食べるものをくれとお願いしたんです。先生のお父さんは俺に何もくれませんでした。俺は今でもそれを覚えています。そんなわけで、先生は俺にもっとお金を渡さなくてははいけないんですよ」

インジャン・ジョーは怒って、その医者腕をつかみました。

医者がインジャン・ジョーを殴ると、彼らは二人とも地面に倒れました。

「俺の友達を殴るな！」とマフ・ポッターは叫びました。

マフとロビンソン先生は、取っ組み合いのけんかを始めました。

全てがあっという間に起こりました。

ロビンソン先生はマフ・ポッターの頭を殴りました。

マフは意識を失って地面に倒れ、インジャン・ジョーはマフのナイフを取り上げました。

インジャン・ジョーは地面の上にいるマフを見ると、ナイフでロビンソン先生を殺しました。

医者はマフの頭の上に倒れて、マフを血で覆いました。

インジャン・ジョーは、地面の上にいる二人の男を見ました。

まず、インジャン・ジョーは死んだ医者ポケットからお金を盗みました。

それから、インジャン・ジョーは血まみれのナイフをマフの右手の中に置きました。

数分後、マフは少し動いて、目を開けました。

マフは医者死体を押しやって、右手にあるナイフを見ました。

「な…何が起こったんだい、ジョー？」と彼はゆっくりと尋ねました。

「とても悪いことだ、マフ。お前はその医者を殺したのさ！ どうして彼を殺したんだ？」とインジャン・ジョーは言いました。

「俺は殺していないよ！」と、ひどく混乱したマフは言いました。

「医者が俺の頭を殴って、俺が倒れたんだ…。今、その後のことは何も思い出せない。教えてくれ、ジョー、何が起こったんだ？」

「お前は医者と取っ組み合いしたんだ」とインジャン・ジョーは言いました。

「医者はお前の頭を殴り、お前は地面に倒れた。それからお前は立ち上がり、ナイフを取って彼を殺したんだ」

「分からないよ」とマフは叫びました。

「俺はナイフで戦ったりしない。俺はロビンソン先生を殺したいなんて思わなかった。彼は若くて非常に優秀な医者だった。彼には未来があった。ああ、これはとんでもない！ ジョー、誰にも言わないでくれ、お願いだから！」

「心配するな。俺は誰にも言わないよ」とインジャン・ジョーは言いました。

「だが、今すぐお前はこの墓地を去らなければいけない。早く。行くんだ！」

「ありがとう、ジョー」とマフは言いました。

「お前は本当の友達だよ」

マフ・ポッターは走り去り、インジャン・ジョーは彼をじっと見ていました。

それから、インジャン・ジョーはマフのナイフを注意深く医者死体の近くに置くと、墓地を去りました。

トムとハックは起こったことの全てを見て、おびえました。

彼らはそっと立ち去り、墓地から走って村に戻りました。

彼らは古い家に着いて、そこに隠れることにしました。

「僕たち、何をしたらいいんだろう？」とトムは尋ねました。

「僕たちは全部見た。インジャン・ジョーが医者を殺したんだ」

「俺たちに何ができる？」とハックは言いました。

「俺たちは誰にも言えないよ。俺はインジャン・ジョーが怖い。やつは危険だ。お前は心臓にナイフが欲しいか？」

「僕だって彼が怖いよ」とトムが言いました。

「君の言う通りだよ、ハック、インジャン・ジョーと今夜起こったことについて、僕たちは誰にも言えない。ただどかわいそうなロビンソン先生、そしてかわいそうなマフ！」

「誰にも言わないって約束してくれ！」と大きな目でトムを見ながら、ハックは言いました。

「約束する」とトムは言いました。
「約束するよ！」